

## 本田一成著『くみじょ&gt;を考える』信山社ブックレット（2025年）

『労働調査』でも連載をしていただいているクミジョプロデューサーこと本田一成先生が書かれた“クミジョ”本である。本田先生は様々な媒体で“クミジョ”について発信されており、読者のなかには目にしたことがある人も多いのではないだろうか。かつては、労働組合だけでなく、労働組合研究、労使関係研究にはジェンダーの視点が不十分だったと言える。他の分野も含めて、ジェンダー研究は女性研究者によるものが多いが、労働組合のジェンダー研究を男性研究者が主体的に行う意義はとても大きい。

本書はブックレットという形で出版されており、手に取りやすく、かつ、読みやすい一冊である。他方、単なる“クミジョ”本ではなく、労働組合の組織構造や組合役員選出の仕方など労働組合のテキストとしても読むことができる。そして、その対象が労働組合の組合役員、組合員だけでなく、労働組合と直接接点がない国民に向けられている点が特徴といえる。

“クミジョ”をいまさら説明する必要はないかもしれないが、本書の定義では、労働組合の女性役員や職員だけでなく、労働組合の組織内議員、研究者、OGなど「ゆるく広い範囲」で捉えられており、推計では10～16万人にのぼるといふ。著者は、労働組合組織率とともにリアル組織率（労働組合に肯定的な意思を持って加入し、積極的に参加する人の割合）の低下が続く中で、「クミジョの増強」こそが現在の労働組合にとって重要であると主張する。

この間、労働組合全体の傾向として女性役員は増えている。しかし、女性組合員比率に応じた女性役員を選出するという目標には至っていない。こうした女性役員が増えきらない状況を、本書では、“クミジョ”の「壁」と「崖」として分析する。前者の「壁」は、家族、仕事、労働組合にあり、また、「崖」は女性が組合役員として活動しているときに、モチベーションが下がる体験を指す。その背景には、労働組合のなかで少数派であるがゆえに、個人の意見ではなく、女性を代表した意見を求められたり、女性ということで役割が集中してしまうといった状況が指摘されている。

もう一つの特徴は、女性役員の選出について「絶対に失敗しない方法」を示している点である。詳細は本書で確認してほしいが、著者が見聞きしてきた失敗事例をもとに、順を追った具体的な方法が示されている。また、失敗しない方法の最後には、外部との交流の必要性について触れられている。筆者自身、調査を通じて様々な組合と話をする、それぞれの労働組合には独自のスタイルがある一方で、そのスタイルを労働組合の「標準」として捉えているような印象を受けることも少なくない。女性役員の選出や育成のヒントは、他の組合との交流を通じて見つかることもあるのではないだろうか。

最後にもう一冊“クミジョ”本を紹介したい。小池詩良著『ガラスの天井の下で』（井上出版企画、2026年）である。本書は「エッセイ絵本」であり、労働組合の女性たちの声と色鮮やかな挿絵で表現がされており、実際に手に取ると、とても美しい書籍である。声としてあげられている女性たちの経験は、読んでいて方がつらい気持ちになってしまうような内容もあるが、これも現実であることを思い知らされ、ジェンダー平等は「人権」を守る取り組みであることを強く意識させられる。前著も“クミジョ”、“クミダン”インタビューに基づいた分析が多く含まれるが、2冊を読むと、より女性役員が乗り越え（ようとし）てきた「壁」や「崖」の実態が伝わってくる。

（後藤 嘉代）